

平成 26 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	26K04	氏名	荒井 良男
研究主題	児童の問題行動における教員の理解・指導に関する研究		
所属校	日野市立南平小学校	派遣先	創価大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>学校では、日々、多様な児童の問題行動が起きており、それらの行動に対して、教員の適切な理解と指導が求められている。</p> <p>教員の懸命な指導にもかかわらず、児童の問題行動がなかなか改善しない状況も多く見られる。多くの場合、教員の理解と指導は、その場面に對峙した教員の意識に依存してしまっているのが現状ではないだろうか。</p> <p>こうした現状と課題を踏まえ、本研究では児童の問題行動に対する教員の理解と指導について調査研究を行い、児童にとってより効果的な指導を可能にする在り方を探求することとした。</p> <p>そこで、児童の問題行動に対して、教員がどのように理解をし、どのような指導をしているのか、またその関わりを明らかにするため、質問紙を使った調査研究（研究1）を行った。また、実際のケースを分析し、研究1の結果を検証するため補助研究として事例研究（研究2）を行った。</p>
II 研究の方法	<p>（研究1）教員への質問紙調査を実施した。質問紙は、都内公立学校の現役教員5名に対し、指導に難しさを感じた児童の問題行動場面についてインタビューし、それを基に次のような項目を設定した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 児童の問題行動場面：5 ケース <ul style="list-style-type: none"> 1 教員の指示に従わないケース 2 学習活動を行わないケース 3 固まってしまうケース 4 暴言を吐くケース 5 他者との関わりをシャットアウトしてしまうケース ○ 教員が児童の行動をどう捉えたか【理解】：4 項目 <ul style="list-style-type: none"> ア 児童の能力不足やしつけ不足という理解 イ 表面的には分からない隠れた理由があるという理解 ウ 人間関係の不足によって引き起こされるという理解 エ わざとや怠惰であるという理解 ○ 理解に応じた児童への対応【指導】：5 項目 <ul style="list-style-type: none"> a しつけ的な指導 b 励ましの指導 c 行動の裏にある理由を確かめる指導 d 感情や行動を受容する指導 e 問題行動を強化しないために意図的に無視をする指導 <p>5つのケースごとに、理解と指導の項目について4件法を用い調査した。</p> <p>実施時期 平成26年10月初旬～11月 実施対象 東京都都内の公立小学校教員239名</p> <p>（研究2）公立小学校第6学年で行われた国語の授業をビデオ録画し、児童の問題行動に関する授業者の対応等について、インタビューを含め分析した。</p> <p>実施時期 平成26年11月中旬 実施対象 東京都内の公立小学校第6学年児童及び授業者</p>
III 研究の結果	<p>研究1「調査研究」</p> <p>1 「教員の指示に従わないケース」 平均得点が最も高かったのは「表面的には分からない隠れた理由があるという理解」と「励ましの指導」だった。しかしながら、次に得点が高かったのは「児童の能力不足やしつけ不足という理解」と「しつけ的な指導」であり、両者の間にはある程度の相関関係が見られた。(r=.370, p<.001) このことから本ケースでは、共感的に理解と指導をしようとする面、しつけ的に理解と指導をする面のいずれも見られた。</p> <p>2 「学習活動を行わないケース」 平均得点が最も高かったのは「表面的には分からない隠れた理由があるとい</p>

	<p>う理解」と「励ましの指導」であった。さらに、両者の間にはある程度の相関関係が見られたので ($r=.349, p<.001$)、このような理解と指導をとっている教員が多いと言える。</p> <p>さらに、男女別にして t 検定を行ったところ、「表面的には分からない隠れた理由があるという理解」について、男性教員より女性教員の方がより強い傾向があると分かった。 ($t=3.690, df=205, p<.05$)</p> <p>3 「固まってしまうケース」</p> <p>平均得点が最も高かったのは、「表面的には分からない隠れた理由があるという理解」と「感情や行動を受容する指導」であった。他のケースと比べて理解項目の得点は全体的に低かったが、一方で「感情や行動を受容する指導」が本ケースに限り唯一 3 点以上 (4 点満点中 3.32 点) を得ていた。</p> <p>さらに、年代別にして分散分析を行ったところ、「児童の能力不足やしつけ不足という理解」について、若い教員より 40 代以上の教員は、より強い傾向があると分かった。 ($F(2, 234)=5.134, p<.01$)</p> <p>4 「暴言を吐くケース」</p> <p>平均得点が最も高かったのは、「表面的には分からない隠れた理由があるという理解」と、一方では「しつけ的な指導」であった。この「しつけ的な指導」と次に高い得点を得ていた「児童の能力不足やしつけ不足という理解」との間には、かなり高い相関があった ($r=.519, p<.001$)。よって、問題行動には隠れた理由があるかも知れないと理解する反面、しつけ不足であるとの理解し、そこで、そのまましつけ的な指導が行われていることも多いと言える。</p> <p>さらに、通常学級担当者と特別支援関係担当者とに分け、t 検定を行ったところ、「問題行動を強化しないために意図的に無視をする指導」について、特別支援関係担当者はより強い傾向があると分かった。 ($t=2.44, df=37, p<.05$)</p> <p>5 「他者との関わりをシャットアウトしてしまうケース」</p> <p>平均点が最も高かったのは「能力不足やしつけ不足という理解」と「励ましの指導」であった。</p> <p>さらに、通常学級担当者と特別支援関係担当者とに分け、t 検定を行ったところ、「わざとや怠惰であるという理解」 ($t=2.48, df=44, p<.05$) と「しつけ的な指導」 ($t=2.33, df=37, p<.05$) について、通常学級担当者は、より強い傾向があると分かった。(図 9 参照)</p> <p>研究 2 「事例研究」</p> <p>授業中、A 児が友達の意見に対して、不満を表す言動をとった場面に注目した。調査研究の「暴言を吐くケース」にあたった。</p> <p>授業者は A 児へ、事前に全体の場で授業のルールを守るよう指導をしていた。その上で今回は、A 児へ特別な指導をすることなく授業を続けた。A 児は適度な時間を置くことで友達への態度を改め、適切な発言でその後の授業を盛り上げた。</p> <p>授業者は 30 代女性で、特別支援の必要性を感じて研修を深めていた。A 児の言動を「からかおうとしてわざと不適切な言動をとっている」と理解し、「あえてそっとしておく」という指導を行っていた。</p>
IV 考察	<p>教員対象の特別支援教育の研修が始まり 7 年を迎える。本研究を全体的に見ると、特別支援教育に対する理解の浸透もあり、教員は児童を多角的に理解しようとしていることが分かる。しかも、励ましつつ行動改善を目指している様子がうかがえた。しかし、他者に被害を与えるような暴言を吐くケースでは直接的な叱責や注意をすることが多いことも見て取れる。これは、通常学級での指導の中で、個に対する指導だけではなく、学級全体に与える影響を配慮しているからだと考える。現在、インクルーシブ教育システムの構築が注目されているが、個別支援と学級全体の指導との調和が大きな課題として見えてきた。</p> <p>さらに、本研究で明らかになったのは、教員一人一人が多様な児童理解と指導の観点をもっているということである。私は特別支援学級の経験がある。そこで私は、教員一人の観点ではどうしても一面的になりがちなることを痛感した。通常学級と通級や特別支援学級が、教員同士の連携を深めることで、多様な理解と指導について意見を交換し合い、共通理解を図っていくことの必要性を改めて感じる。</p> <p>児童に寄り添った効果的な指導について、本研究を通して見えてきた個別支援と学級経営の調和、そして教員同士の連携という課題について、今後も追究していく。</p>

